


# すまいるたん



## 美空ひばりさんに 捧げた青春 西村克子さん

「お姉さんは名プロデューサーだったのよ。」

美空ひばりさんのお母さん加藤（旧姓諏訪）喜美枝さんは、南千住3丁目の生まれで、家業は石炭屋さん。7人兄弟の長女が喜美枝さん、西村克子さん（73歳）は20歳離れた末っ子。克子さんが、第四瑞光小5年の時に福島に疎開し、6年生で戻って来た時には東京大空襲で実家は跡形もなくなり、お姉さんの喜美枝さんの嫁ぎ先の横浜に一家で引っ越しました。克子さんは美空ひばりさんより4歳上で西年生まれだったので「ニワトリおばさん」とひばりさんから呼ばれていました。克子さんが高校1年の夏、ひばりさんのお母さんの要請でひばりさんの付き人になりました。

「高校は辞めたくなかったし、成績もよかったから学校の先生もびっくりして飛んできたの。演劇部でコンクールに入選もしたこともありました。」

こうして16歳から24歳で結婚するまでの8年間、ひばりさんと共に過ごしました。ひばりさんが深夜帰って来ると、お風呂で背中を流し疲れた足をもんであげ

てひばりさんが寝付いてから床に入る生活で、睡眠時間が3時間しか取れない日もありました。洋裁学校に通わせて貰う約束も、結局多忙な為休みは月2回あればいいほう、通えずじまいでした。残されたひばりさんの弟妹3人の授業参加に喜美枝さんの代わり出て、他のお母さん達より若い為、お母さん達の中に入って恥ずかしい思いをしたそうです。山のように来るファンレターの整理や身の回りのことは克子さんしかわからず、ひばりさんと共に買い物したり現場と一緒に付き添って、ひばりさんのコーディネートでありスタイリストでもありました。

昭和32年、ひばりさんが19歳の時に浅草国際劇場で「塩酸事件」が起きました。ひばりさんの胸にかけてファンから塩酸をかけられました。そばにいた克子さんがとつさにバケツの水をかけて大事にならずにすみました。

「車の免許も取りたかったけど、自分の時間がなくて。辞めたいと思ったことは何度もありました。でもひばりちゃんを尊敬しましたので出来たのですね。何事も呑み込みが早く、時間がないのに舞台上で踊る舞踊もすぐ自分のものにして。レコーディングに行くときロンビアレコードのスタッフが今日はひばりさんだから早く帰れると喜んだほどでした。」

収録に時間が掛からず完璧だったんです。英語も喋れないのに歌の発音がよくて上手だった。舞台も相手の台詞まで覚えていて、記憶力は抜群でしたよ。」

24歳で高校時代の同級生と結婚して付き人を辞めた後も、喜美枝さんから呼ばれると2歳の子供を置いてひばりさんの元に行ったこともありました。

南千住5丁目在住の徳寿大学理事長の小川平吉さん（80歳）は、ひばりさんと克子さんの親戚です。小川さんは、「克子さんは女優の誘いもあったんだけど、喜美枝さんの反対があつて」とおっしゃっています。写真集「美空ひばりプライベート」にはひばりさんの隣にいつも姉妹のような克子さんの美しい笑顔があります。影となる身内がいて光となるひばりさんがいたのでしよう。

品川で小川さんと3人でお会いした時、秘蔵の写真の数々を見せていただきました。

「ひばりさんは、日本一ですからね。」と船村徹さんがおっしゃったとにこやかに話される克子さん。

叔母であり、姉でありファンであった克子さんの中ではいつまでも、ひばりさんは生き続けています。

